

共同研究「日本の酒類市場と行政をめぐる諸問題：比較研究を踏まえて」2023年度活動報告

毛 桂榮・蛭原 健介

2023年度の共同研究「日本の酒類市場と行政をめぐる諸問題」に関しては、研究会メンバー各自の個人発表などは省略し、ここでは、2つの研究会を中心に紹介する。

1 ワインをめぐる歴史と現在

2023年9月20日にワイン研究家の濱野吉秀さんと、青島大学生命科学院の教授、涂正順さんにそれぞれ講演をしてもらった。

- (1) 濱野吉秀さん（ワイン研究者）、講演題：「私とワイン：特に Yalta 会談記念wineとの関わり」
- (2) 涂正順さん（青島大学生命科学院教授）、講演題：「中国ワイン産業の現状」

濱野さんは、研究会のメンバーがその著書を通じて以前から知っていた。その著書『ワインの“鬼”：「有機葡萄」六十年の軌跡』（2016）、そして『見えてくる日本ワインの未来』（2018）が研究会で話題になったことがある。また、濱野さんは中国西北農林科技大学葡萄酒学院の名誉教授であることも知られていた。（中国では）有名な大学である「西北農林科技大学」の「葡萄酒学院」は、西安の西の郊外にあり、ワイン醸造などを専門に研究する学部で、研究会のメンバーは2017年9月に一度訪問したことがあり、この年報で報告したこともある（学院に関する紹介は、毛「中国ワイン産業の人材養成と資格制度」、本年報2019年7月掲載も参照）。毛「中国におけるワイン産地規制：寧夏のワイン産地保護条例に関連して」を紀要『法学研究』103号（2017年8月）に掲載されたことを濱野さんがたまたま知り、みずから法学部に連絡をとってきたことでコンタクトができて、以後、中国のワイン産業に関する情報を提供してもらった。

涂教授は1998年に上記の葡萄酒学院で博士号を取って、その後中国ワイン醸造専門家委員会で評価委員を担当しながら、ワイン醸造を指導する一方で、青島大学で食品産業、ワイン醸造の授業を、また院生の研究指導を担当している。著書には『葡萄酒知識概論』（中国語、2013）などがある。この研究会は、涂正順教授が来日することを利用して設定されたものである。

研究会では、濱野さんにはワインとの関わりを講演してもらい、また涂教授には最近の中国のワイン産業の動向を紹介してもらうことをテーマにお願いしたが、濱野さんは、ワインとの関わりのほか、「ヤルタ会談記念ワイン」（下記写真も参照）のことをとくに話題にいただいた。濱野さんの講演は、別途原稿があったので、この報告書の後に単独で掲載されることにした。ここではその内容を要約しないことにした。涂教授は、中国ワイン産業、ワイン市場などの動向を紹介してもらった。中国のワイン市場は2010年代に入り、共産党の腐敗対策の推進もあり、停滞期に入ったことが紹介され、ワイン産業では「量的拡大」から「質的強化」へと転換されようと

共同研究：日本の酒類市場と行政をめぐる諸問題：比較研究を踏まえて
する動向が紹介・検討された。あわせて、(有名)ワインの偽造、摘発などの状況も紹介された。



(以上、文責：毛桂榮)

2 地理的表示をめぐる研究会

2023年11月15日(水)午後、フランスから知的財産法分野の弁護士、オリビエ・マンデルさん(パリ弁護士会、マンデル・エ・アソシエ法律事務所パートナー)をお招きし、法律科学研究所において公開研究会を開催した。

今回は、「日・EU経済連携協定(EPA)の中の地理的表示」が講演のテーマ。マンデルさんは、EPAが発効した2019年来日され、第二東京弁護士会の日仏セミナーにおいて、当時の状況について講演された。この研究会では、その後の動向や、未解決の問題などについてお話してもらった。参照：<https://mgulaw.jp/news/20411/>



3 「北海道のワイン 天・地・人」研究会

2024年3月22日、本共同研究では、『北海道のワインに恋をして』(海辺の出版社、2023年)著者、荒井早百合さん(道産ワイン応援団、ワインカフェ・ワインショップ「ヴェレゾン」)をお招きし、

法律科学研究所会議室において公開研究会を開催した。

荒井さんは、2008年に「道産ワイン応援団」を設立し、北海道のワインを全面的に応援する活動を開始。2011年に札幌市内に情報発信基地「道産ワイン応援団 winecafé veraison（ヴェレゾン）」、さらに2021年にはワインショップ・ヴェレゾンを立ち上げ、国内外から多くのワイン愛好家が集う店となっている。今回の研究会では、研究代表者の毛桂榮教授の発案により「北海道のワイン 天・地・人」をテーマに講演していただいた。

講演では、「天」「地」「人」という3つのキーワードにそくして、北海道のワインの魅力とともに、ワイン産業の歴史、現状、課題、今後の展望について、興味深いさまざまな情報が提供された。まず、「天」に関して、もっとも注目されるのは、北海道における気温の上昇である。札幌管区気象台によると、温室効果ガスや都市化の影響で、札幌の年平均気温は100年あたり約2.5度の割合で上昇する一方、北海道日本海側の年最深積雪が減少しているという。かつて、ブドウの収穫は晩秋の寒い時期であったが、近年では、収穫時期が早くなり、日中は半袖で作業できるようになっている。畑の作業がはじまる時期も、以前は4月に入ってからであったのが、現在では3月になっているという。

次に、「地」については、もともと北海道の限られた地域ではじめられたワイン用ブドウ栽培やワイン醸造が、現在では道内各地で行われるようになってきていること、とりわけ冬の寒さが厳しい道東や道北でもワイン用ブドウ栽培が試みられ、ワイナリーが開設されていることが紹介された。道内のワイナリーの数は、現在では64か所まで増えており、年内には70か所、このままのペースでいくとすれば、数年後には100か所に達する勢いである。

さらに、「人」については、荒井さんの近著『北海道のワインに恋をして』で紹介されている多くの生産者たちと、そのワインの魅力が興味深い数々のエピソードとともに語られた。他方で、ブドウ栽培に対する脅威として、近年、鳥獣（アライグマやメジロ）による大きな被害が出ていること、その対策の難しさなどの課題も明らかにされた。最後に、参加者とともに質疑応答やディスカッションが活発に行われた。



(以上、文責：蛸原健介)